【ｐ22～ｐ27】　但馬に牛を　―前田周助―

１　資料活用にあたって

○　長文のため事前に読ませておく。
○　２２ページ～２３ページ１１行目までは､周助の牛への思いの強さについて教師が要点を説明し、２３ページ１２行目から発問構成する進め方もある。

２　資料の読み方のポイント

○　変化するのは：周助（子どもが「周助」になって考えられるように発問を工夫する。）
○　変化するきっかけ（助言）は：「但馬に入る峠で足を止め、故郷の方角を見渡すと、高くて急な斜面の山がたくさん並び、その谷ごとに小さな村がぽつんぽつんと点のようにみえており、その土地が、周助に助けを求めているかのよう」
○　変化するところは：「わたしが大阪に行くわけにはいかないのだ。」

３　読み物資料の素材について

【参考文献等】

・　『但馬人物ものがたり・上巻』、徳山喜重、但馬文化協会・（財）但馬ふるさとづくり協会、１９９８年
・　『周助が犇（はし）る』、前田利家、文芸社、２００８年

○　前田周助の略歴

・　１７９８年（　０歳）　誕生（現・香美町小代区猪谷）。
・　１８０５年（　８歳）　「牛飼い童子」、「牛飼い坊主」と呼称される。
・　１８１７年（２０歳）　近隣の村の娘と結婚。
・　１８２３年（２６歳）　河内（大阪）の市場へ４頭出品し、好評を受ける。
・　１８２６年（２９歳）　前田家親族会議開催（周助の牛への投資が行き過ぎての会議）。
・　１８３３年（３６歳）　養父市場（現・養父市）へ出品し、好評を受ける。
・　１８４５年（４８歳）　非公式に牛市場を隣の村岡（現・香美町村岡区）で開催。
・　１８５０年（５３歳）　村岡より良牛を見つけ出し、周助蔓（つる）の基礎牛とする。
・　１８６８年（７１歳）　家畜商を後継者に託す。
・　１８７２年（７５歳）　没する。

※　故前田周助顕彰碑が建立される。（香美町小代区）

○　地理的背景・時代背景

・　小代区並びに周辺集落は、中国山地の西方に位置し、氷ノ山を中心に高く切り立った山々に囲まれ、その間に深い谷が数本に分かれているうちの一つにあった。それぞれの谷は険しく、急な斜面に張り付くようにして村々が点在し、狭い農地で細々と農業等で生計を立てていた。もちろん、牛はその険しい農地を耕す際の大きな力として飼われていた。まだ食肉用としての牛というより、農耕における機械代わりといった要素が強かった。
・　また、当時は農業収入の他、雪深い地域のため、冬期間は出稼ぎ等も頻繁に行われて、家計を支えていた。生活面では、テレビも電話もなく、ランプやろうそくの火をたよりに細々と暮らし決して裕福ではなかった。どこに行くにも徒歩が中心であった。

○　但馬牛の波及

・　但馬牛からとれる牛肉は脂質・肉質が良いため、但馬牛は松阪牛（三重県）や近江牛（滋賀県）の素牛となっている。また、前沢牛（岩手県）、仙台牛（宮城県）、飛騨牛（岐阜県）、佐賀牛（佐賀県）などのように、但馬牛の血統を入れることで牛の品種改良が行われていることも多い。

※　松阪牛（まつさかうし）など牛を示す場合は「うし」と呼び、神戸牛（こうべぎゅう）など牛肉を示す場合は「ぎゅう」と呼ぶことが多い。

4　展開の具体例

但馬に牛を　―前田周助―

・主　題　名　・ふるさとのために　C（１６）

・資料の概要　・腕の良い牛飼いの周助は、家族に反発されながらも牛の改良に全力を注ぐ。ある日、子牛を大阪の牛市場へ出品し、最高値で売れたことで有頂天になり故郷を離れることが頭をよぎる。しかし、帰り道、峠から見た郷土の風景を眺めた周助は、故郷のために牛の生産に尽力することを決意する。その後も良牛を目指して日々奔走し、「周助つる」と呼ばれる良牛の祖を育てた。

・ね　ら　い　・峠に立って故郷の急な斜面の山と谷あいの村をみて道徳的に変化する周助を通して、地域の人々や生活を大切にし、郷土を愛する道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導入	・今日の資料に興味を持つ。	「但馬牛」の名前を聞いたことがありますか。
展開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・大阪の牛市場で自分の育てた子牛が高く評価された時の主人公の気持ちを考える。 ・「大阪に行くわけにはいかない」とつぶやく主人公の気持ちを考える。 ・良い牛を求めて村から村へと歩きまわる主人公の気持ちを考える。	「おい、次もまた来てくれよな。ぜっ対だぞ！」と言われた時、周助はどんなことを考えたのでしょう。 ・うれしい。自分のしてきたことに間違いはなかった。 ・今まで家族には迷惑をかけてきたけれど、大阪に出れば楽な暮らしができるぞ。 「大阪に行くわけにはいかないのだ。」とつぶやいた周助は、どんなことを考えたのでしょう。 ・ふるさとを盛り上げるには牛の飼育しかない。 ・自分の家族の暮らしが楽になることだけを考えていてはいけないんだ。 ・これからも良牛を育てて、日本一の故郷にしていこう。 良い牛を求めて村から村へと歩きまわる周助は、どんなことを考えたのでしょう。 ・良い牛を育て後々まで伝えることで、ふるさとを豊かにしたい。 ・みんなにも、良い牛を育てることが村を豊かにすることをわかってもらおう。
終末	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。

22ページ～23ページ11行目までは、周助の牛への思いの強さについて教師が要点を説明する。

苦労が実り、自分の育てた子牛が高く評価される声を聞いた時の主人公の心を考えさせる。

峠から見た故郷の風景がきっかけとなり、故郷を愛する意識が主人公に起こっていることをおさえる。

小代村の将来のために良い牛を増やそうと行動している主人公の郷土を愛する心情の高まりをおさえる。